

意味論の「外延化」は何をもたらすのか

高谷遼平 (Ryohei Takaya)

日本学術振興会・東京大学

自然言語の意味論的分析、特に、代名詞や時点、世界に関する情報の分析において用いられる手法は、おおまかに次の二つである。すなわち、第一に、対象言語の論理形式上に変項やそれを束縛する量化子を措定して分析を与える方法、そして第二に、メタ言語上に措定されるパラメータとそのパラメータの値を変動させる内包オペレータを用いる方法である。第一の方法を「外延的アプローチ」、第二のものを「内包的アプローチ」と呼ぶとすると、外延的アプローチが適用される典型例は代名詞であり、内包的アプローチが適用される典型例は世界ということになるだろう。このような標準的見解のもとでは、代名詞は変項として論理形式上に明示的に現れ、変項の値がその代名詞の指示対象とされる一方で、世界に関する情報はメタ言語上のパラメータの値として与えられることになる(例えば、内包オペレータとして分析される様相表現の作用域にない文の解釈が関わる世界パラメータの値は、デフォルトの世界、すなわち発話世界となる)。

これらに対して、時点にどちらのアプローチを適用するのかは現在もなお論争的だと言える。言語哲学分野に限っても、Lewis (1980)やKaplan (1989)が内包的アプローチを支持している一方で、Richard (1981)やKing (2003)では外延的アプローチが採用されており、統一的な見解が存在しているとは言い難い(ただし、Cresswell (1990)やOgihara (1996)など、形式意味論の分野においては外延的アプローチが主流であるように見える)。いずれのアプローチを採るのかの基準として、実際の言語現象を観察しなければ得られないような経験的問題——例えば、時点が代名詞と同じような意味論的振る舞いをするのか——に加え、一方のアプローチを採用することでコミットすることになる(と考えられている)哲学的立場の是非という要素もまた存在しており、その判断は容易ではない。

このような状況のなかで、本発表では、もしも代名詞や時点に加えて世界に関する情報さえも外延的に分析するのが適切であるならば、言い換えれば意味論の外延化が全面的に推し進められるとすれば、そのとき意味論構築と密接に関係する種々の哲学的概念、特に命題概念や内容概念はどのような影響を受けるのかということについて検討する。よく知られているように、時点に関する情報を外延的に扱うのか内包的に扱うのかという問題は、しばしば命題の永久主義(eternalism)——命題はその内容のうちに時点に関する情報を含む——と時点主義(temporalism)——命題は時点に関する情報を含まない——の対立という文脈で論じられる。すなわち、二つのアプローチのうちどちらを選択するのかは、命題の内実がいかなるものであるのかに対して直接的な影響を持つと考えられてきたのである。この考えを拡張すると、世界をいずれのプローチのもと分析するのかに応じて、命題が世界を含むようなものなのか否かということが決定されるということになるだろう。実際、Schaffer (2012, 2021)などでは、時点のみならず世界に

ついでの情報も代名詞と類比的に捉えることが可能であること、世界に関する外延的アプローチが意味論的に強い表現力を持つことなどを根拠に、命題の必然主義(necessitarianism)——命題はその内容のうちに世界に関する情報を含む——の可能性が示唆されている(もちろん、必然主義と対置されるのは、命題は世界に関する情報を含まないという伝統的な命題観、すなわち命題の偶然主義(contingentism)である)。

本発表が特に着目するのは、意味論はその理論内部に複数の命題概念・内容概念(とみなされうるもの)を含んでいるという事実である。したがって、たとえ外延的アプローチと内包的アプローチの選択に応じてある種の命題概念の存在が要請されるとしても、そこから命題に関する何らかの立場が導かれるとは限らない。本発表では、この点を念頭に、意味論の外延化は必ずしも命題一般について直接的な影響を持つわけではないと論じる。

参考文献

- Cresswell, M., 1990, *Entities and Indices*, Dordrecht: Kluwer.
- Kaplan, D., 1989, "Demonstratives: An Essay on the Semantics, Logic, Metaphysics, and Epistemology of Demonstratives and Other Indexicals," J. Almog, J. Perry, & H. Wettstein eds., *Themes from Kaplan*, Oxford: Oxford University Press, 481-563.
- King, J., 2003, "Tense, Modality, and Semantic Values," *Philosophical Perspectives*, 17(1): 195-246.
- Lewis, D., 1980, "Index, Context, and Content," S. Kanger & S. Öhman eds., *Philosophy and Grammar*, Dordrecht: Reidel, 79-100.
- Ogihara, T., 1996, *Tense, Attitudes, and Scope*, Dordrecht: Kluwer.
- Richard, M., 1981, "Temporalism and Eternalism," *Philosophical Studies*, 39(1): 1-13.
- Schaffer, J., 2012, "Necessitarian Propositions," *Synthese*, 189(1): 119-162.
- Schaffer, J., 2021, "Confessions of a Schmentencite: Towards an Explicit Semantics," *Inquiry*, 64(5-6): 593-623.